

日本男女スポーツ考

高橋 義雄

男女の置かれた環境の違いによって、スポーツはいつたい、どのようにとらえられているのか。小学生を対象に調査し、考察してみると……。

私は、スポーツ社会学を専攻する大学院生です。現在、私が取り組んでいる研究は、小学校高学年児童のスポーツ活動が、児童の日常生活においてどのような意味を持つのかを分析することです。そこでわかったことは、男子

は「学習塾に行くかスポーツ組織に参加するか」を選択するのに対して、女子は「お稽古ごとの中でスポーツをするか音楽をするかを選択する」という傾向があるということです。

スポーツ参加の男女差

児童にとってスポーツ組織に参加する意味には、男女差がありました。男子は学習塾とスポーツ活動の関係があることから、学歴社会の影響が如実にあらわれています。調査は横浜市で行ったのですが、依然として男女にスポーツ組織参加の差がみられました。

話が前後しますが、私が女性とスポーツに興味を持ったきっかけは、ジェンダー社会学者の「お茶の水女子大学江原先生の『ジェンダーと教育』のゼミに参加の機会を得たことでした。ゼミは、男女の文化的・社会的な差がどのような社会の仕組みで生まれるかと

いう内容でした。そこで私が紹介した論文は、スポーツが男性にとって男性らしさを高揚する手段であり、社会移動の機会を与えるというアメリカ人社会学者メセナーの論文でした。

スポーツは種目にも異なりますが、歴史的に自由な時間を有する男性のものでした。有閑階級の男性は、自分の勇氣と力を示すためにスポーツを利用したのです。また、アマチュアリズムの精神をうたい、低い階級の男性（スポーツを職業とする人）の参入を拒んできました。スポーツを職業とする人がスポーツを牛耳る可能性がなくなった昨今では、プロ選手の参加が多くの大会で認められ、いっそう男性のスポーツ活動は、自分の地位を高めるのに役立つものになりました。

しかし女性の場合、地位を向上させる機会が多くはありません。あつたとしても世界一にならなければならなかったり、女性らしさを表現するものでなければなりません。男性は、スポーツで有名になるし、高額所得者にもなれるのに対し、女性の場合はなりにくい環境にあります。一般的に女性のスポーツ活動は、健康のための「運動（エ

クササイズ）」の域を超えることに、社会的な抑制がかかる傾向があります。そのため女性は継続してスポーツ活動をする環境になく、サポートする組織もないため、競技スポーツからドロップアウトせざるを得ないのです。

地域社会に根付いた女性のスポーツを

Jリーグの誕生は、日本のスポーツ文化において、地域に根付いたスポーツ活動の振興という新しい考えを示しました。将来は女性のスポーツも先導役を果たすプロスポーツ（観客を集められるスポーツ）が必要でしょう。それは会社の宣伝や社員の意識の高揚のための企業のスポーツでは望めません。企業スポーツでは企業の意向に左右され、限られた種目しか行なわれなくなる可能性があります。これからは、各地域社会で女性のスポーツ活動の振興をはかり、地域でそのスポーツ自体の人気を得ることが良いと思います。さらにメディアに取材される回数を増やす努力をして、女性のスポーツを支持する層の育成につとめなければいけないでしょう。新しい動きとして、総合スポーツクラブの設立を将来の計画

にしている鹿島アントラーズでは、広く女性にも門戸を開く方針です。例えば、鹿島町では女性のサッカー審判員として木村和恵さんが活躍していました。アントラーズは彼女を心援し、しかもカシマスタジアムには女性審判用の更衣室も用意されていました。

スポーツは子どものものであるの!?

最近、気づいたのですが、体育大学の学生は「男子」「女子」という言葉を良く用いるような気がします。おそらくスポーツ種目で「女子○○競技」や「男子○○競技」と表現するからではないでしょうか。社会では女子作家、女子演出家などという言葉は使いません。辞書には「男子」「女子」に男女の意とありますが、私には、「子ども」のニュアンスを逃れることはできない感じがします。日本ではこれだけスポーツが隆盛をきわめていても、スポーツが子供の文化として認識されているのではと疑いたくなります。皆さんはどう感じになるでしょうか。へたかはしよしお W S F ジャパン会員、東京大学大学院教育学研究科体育学専攻在学中